

きたしらかわはいじ 北白川廃寺の発掘調査（第13次調査）

調査期間：令和2年 10月7日（水）～ 11月5日（木）
調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 北白川廃寺について

北白川廃寺は左京区北白川大堂町を中心として広がる遺跡です（図1）。飛鳥時代に建立され、平安時代末には廃絶していたことが分かっています。伽藍配置について、東側の段丘上に金堂、西側に塔が存在したことが明らかになっています（図2）。金堂・塔は、ともに瓦積みによって化粧をされていました。金堂基壇は東西36m・南北23mの大規模なものです。その規模は、奈良の山田寺や法隆寺などよりも大きいことがわかっています。

また、塔基壇は一辺約14mの正方形で、法隆寺五重塔基壇とほぼ同規模です。数度の修復を経て、最終的には石積み基壇に改修されていました。

2 周辺の発掘調査成果

北白川廃寺は12回の発掘調査が実施されています。北白川廃寺第1次調査（1934年）では、金堂基壇が良好な状態で確認されました。その後、第2次調査（1974・1975年）では、金堂基壇の西約80mの地点で塔基壇と心柱の痕跡が確認されました。塔跡のすぐ北側で行われた第6次調査（1992年）では、東西方向の2列の柵列と、その北と南にそれぞれ幅約2mの東西方向の溝（北溝・南溝）、掘立柱建物などが確認されています。さらに西側で実施された最新の調査である第12次調査（2020年）で東西方向の溝を3条確認し、出土遺物から素弁十葉蓮華文軒丸瓦が初めて出土し注目されています。

今回の調査は第13次調査になります。

3 発掘調査成果について

今回の調査地は第12次調査の西隣接地になります。これまでの北白川廃寺の調査の中で一番西端に当たります。本調査では東西方向の溝を2条、南北方向の溝を1条、計3条の溝を確認しました（図3）。東西方向の溝1は、東隣接地の12次調査で確認された溝6の延長線上に位置していることから、それに連続する溝と考えられます。また第6次調査の北溝（SD7）の延長とも考えられます。溝2は南北1.5m、東西7m以上の規模を測ります。南北方向の溝6は東西1.1m、南北5.6m以上の溝です。北白川廃寺の伽藍復元図を落とし込んだ大正時代の地図（図5）を見ると、道で囲まれた長方形の区画があります。この区画は大正時代の地割です。今回の調査で確認した溝6はその長方形の西側のラインとほぼ同位置にあることが分かります。古い地形図は遺跡の復元の手がかりになることがあるため、大正時代の地割が今回確認した溝6と何らかの関係がある可能性も考えられます。また、北白川廃寺の遺跡範囲内の西端で確認されたことから北白川廃寺の西限の溝の可能性も想定されますが答えを出すにはまだ十分な検討が必要です。

また、出土遺物も注目されます。溝2から奈良時代の須恵器や土師器のほか、多量の瓦が出土しました。出土瓦のほとんどが平瓦ですが、中には単弁六葉蓮華文軒丸瓦や単弁八葉蓮華文軒丸瓦といった軒先に葺かれる瓦などもあります（図4）。その他に、複数の「叩き目」が残る平瓦を多数確認したことも注目されます。

今後周辺の調査や出土遺物を含めて様々な検討を進めていきたいと思います。

（清水早織）



図1 調査地位置図



図3 調査区全景（北から）

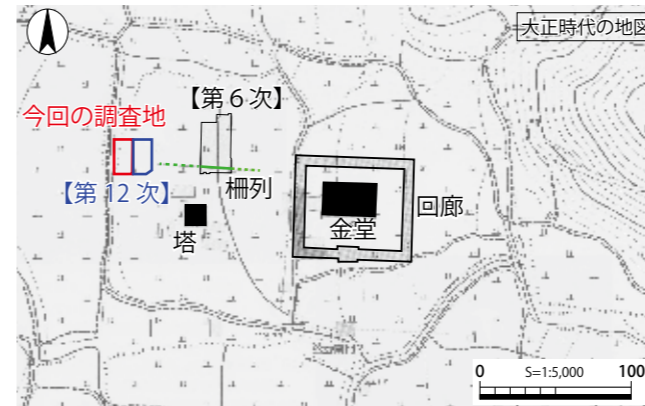


図2 北白川廃寺の伽藍配置（堀2010を一部改変）



図4 出土瓦写真

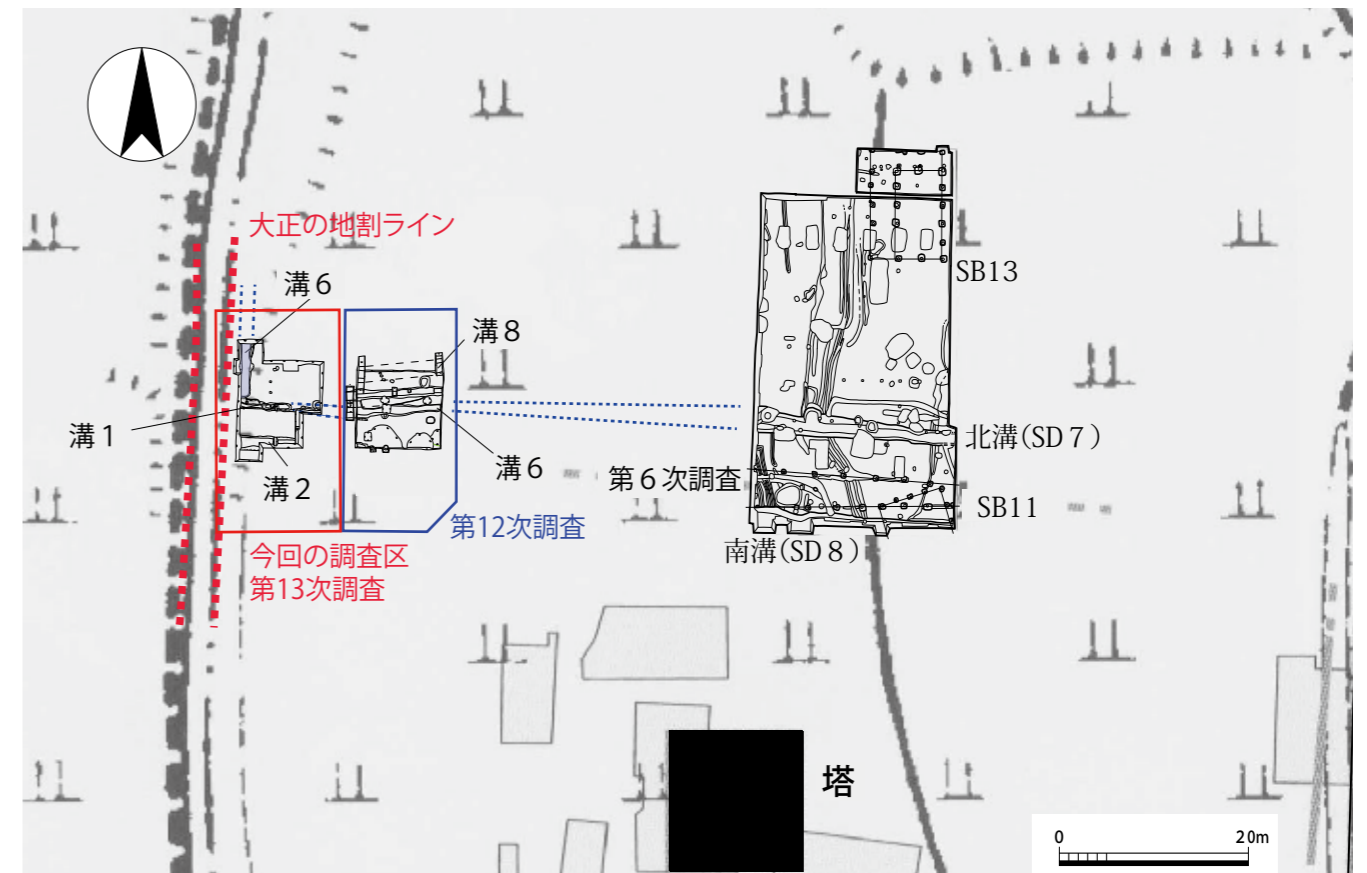


図5 発掘調査区平面図（1：800）